

元木 靖：

## 現代日本の水田開発

—開発地理学的手法の展開—

古今書院, 1997年2月, A5判, 274頁, 図62, 表53, 写真13, 7,600円

わが国の耕地面積の半ば以上は水田であり、1960年代の拡張耕地面積の累計37万haのうち水田の拡張面積累計は28万haに達している。戦後特に1960年代に進められた開田は現在の日本農業を捉える上からも避けられない問題である。それにも拘わらず、現代の水田造成を体系的に解析した地理学書は大変少ない。

本書は、その欠を補う優れた著作であって、1972年以来刊行されてきた著者の積年の研究成果に新たな論述を加えて体系化したものであり、その論考の核となるものは、和賀平野など北上川流域周辺の高燥地型開田である。

第2次大戦以後とくに1960年代は、日本の歴史を通じて、空前の水田拡張期であるが、著者は開田を、沖積地など低平地へ進む「低平地型開田」と、概して水利の得難い高燥な段丘面・扇状地・洪積台地などへの「高燥地型開田」とに分け、昭和期以降特に戦後の開田では、高燥地型の開田が重要な意義を持っており、このタイプの開田を現代水田開発を特徴づけるものとしたことが本書を貫く基本的な視点のひとつであり、第2の視点は、現代の水田開発が、限界地の拡大としてのみ捉えられるものではなく、社会の構造的な変化に伴う国土利用の再編成ないし農業部門の地域分化として捉えることによって、その意義を示すことができるという立場で解析を進めた点である。

第1の見地から、北海道の泥炭地の開田や八郎潟の干拓のような現代の水田開発を特徴づける上からは、「高燥地型開田」と双璧をなしている大規模な「低平地型開田」の事例も除外して、論考の対象を「高燥地型開田」に限定し、第2の立場については、その視点を検証する上に必要な事例研究については、北上川流域周辺から和賀平野などの特定地域を限って選択的に取り上げている。

本書は「現代日本の水田開発」という包括的題名を持つが、上記のような限定があるにも拘わらず、違和感なしにこの表題を受け入れられるのは、ひとつには、近代の開田特に高燥地型開田に関する研究事例について、地理学以外の分野のものも含めて広範且つ詳細なレビューが行われているためであり、また、全国的視野から近代水田開発の統計解析を行い、研究対象選定の必然性と位置づけを行っているためである。副題に「開発地理学的手法の展開」と示されているが、「開発地理学的手法」という考え方が提起されていることは、本書の一つの特色となっている。

本書の構成は次の通りである。まず著作の目的と方法が述べられ、既存の研究を詳細に展望した(序論=第1,2章)うえで、近代以降の水田開発がどのような一般的特徴を持つかを、その背後条件とともに考察し(第I部=第3-5章)、典型例によって水田開発が展開したメカニズムを明らかにし(第II部=第6,7章)、開田後の農業の動向と水田開発の意義と限界について考察し(第III部=第8-10章)最後に各章で述べられた結論を要約したほか、補章を設けて開発地理学的手法について論じている。

開発地理学という言葉は、多くの読者にとっては耳慣れないものであろうから、はじめにこの言葉について一言して置きたい。著者は、東北大学の富田芳郎が1949年に「開発地理学」の名称を使い、これが、わが国においてこの言葉が使われた最初であろうとしている。実は、この名称は終戦直後の1946年に東北大学理学部地理学教室の教育課程が初めて公式に定められたとき、地図学、自然地理学第1、同第2、人文地理学、地誌学とともに、基本科目とされたものである。従って、この名称の提唱者は同年講座主任(兼任)に就任した高橋純一であった。筆者は、このとき同教室の学生であったが、学生に対する説明では、政策課題に答えられる学術の形成がうたわれ、開発は単に開拓を意味するのではなく、工業開発・都市開発など広く開発行為一般を指すものとされた。しかし、高橋の在職中にはこの講義は開講されず、

後任の富田はこの教育課程に沿って講義を行ったが、学術文献にその理念や体系を示したことはなかった。以来半世紀を経て、初めて開発地理学なる呼称を冠した学術書が、この教室の出身者によって刊行されたのであるから、筆者には少なからざる感懐がある。

次に、開発地理学とその手法についての著者の考えを紹介したい。著者は、開発地理学として展開すべき対象、課題について、要旨以下のように説いている。開発地理学の対象は、資本主義発達に伴う地域変容と表裏の関係に立つ開発問題であり、開発の具体的なプロセスを検証し地域変化の機構を明らかにすることと、開発後の効果・問題点あるいは地域的な影響に目を向けることが重要な課題となる。そして、このような課題に答えることができたとき、開発地理学は、はじめて開発の地理学としての意義を獲得でき、開発を推進するせよ、制御するにせよ社会的に発言する道が開かれてくる。開発地理学においてなすべき基本的事項は、開発の地域状況を客観的に把握し、地理的論理としてその展開メカニズムを解明していくことであろう。

また、開発地理学的方法の枠組みとして著者が提示したものを要約すれば、次のようになろうか。

1. 現代の開発は、近代化（＝資本主義発達）に伴う地域の再編成の一環であり、地域問題として展開し、政策によって左右され、地元の意志と行動を通じて具現されるものであるから、歴史的な前提がないと問題検討の主題が明らかにされないし、地元の対応を把握するという視点も不可欠である。
2. 現代の開発は、それが展開する個別地域を把握するだけではなく、より広い空間との関連で検討してこそ、問題の発生・成立の理由が広い視野から整合的に説明される。地域変化を引き起こす社会経済的背景や空間的配置との関連を探ることによって、はじめて個別の開発の位置づけやその意義が理解できるものである。その点では、地理学の伝統的な研究手法である分布論と地域論が解析の武器となる。
3. 開発事業の展開は一定のたかたちをとるわけではなく、実態の類型化を通して、開発メカニズムの特殊性と一般性が把握される。この場合、

具体的な土木事業の分析がきわめて重要である。

4. 開発後の地域変化や住民の対応の動向と、事業の成果・問題点とを把握することも重要である。
5. 以上の解析の上に、地理的な視点を通じて、総合的に開発のメカニズムを系統的に見出すことが大切である。

本書では、全編を通じて、ここに示された問題意識と研究手法が貫かれており、地理学研究にしばしば見られた風土論的な分析視角からではなく、水田開発を日本の社会変化のなかに位置づけて把握するという立場がとられている。ここに、著者が副題を開発地理学的手法の展開とした所以を窺うことができるのだが、更に端的に著者の研究方法が汲み取れるのは、巻末近くの「結論と展望」に示された表（表55）においてである。この表は、要を得た総括であり、北上川流域地方を例にとった近代の高燥地開田の地域性を大観できる成果であるが、同時に、この表には、5つの調査事例について次の項目についての特徴が一覧表示されていて、著者の視点を簡明に示すものとなっている。

<開田の進展時期と地域性>

開田史上の特徴 開田の進展地域

開田型（低平地型か高燥型か）

時期（昭和初期か1960年代か）

規模（大規模造田か小規模造田か）

<事業展開と開田要因>

地形・土壤 開田の契機 事業主体

開発計画の有無・変更 資金の性格

水利開発 造田技術 開田地の景観

<開田後の状況>

水田所有農家の経営形態 生産調整への対応

冷害の現れ方 問題点

ここに見られるように、著者の視点は、少なくとも「現代の」水田開発を巡る状況について一切の必要事項を網羅しようとするものなのである。

本書の中心になっている第II部は、「現代における水田開発の展開メカニズム」と題され、「北上川流域周辺を例とした実証分析」の副題が付いている。ここに示された事例は、前述のように5地域であるが、国家主導型の大規模造田の例として、

昭和初期に開田された北上盆地中心部和賀平野の和賀川左岸地区と、戦後に開田された和賀中部開拓建設地域が、農民主導型の小規模開田の例としては、水利開発の特徴を異にする北上山地北部(溪流依存型)、北上川下流丘陵地帯(溜池修築型)、宮城県高清水町(地下水開発型)が採られている。そして、第Ⅲ部の開田後の状況については、和賀平野と北上山地北部のほか、岩手山麓の高冷地開田地域が加えられている。挙げられた事例はかなり制限されたものだが、その記述は克明で、丁寧に資料を検討し、野外調査を積み上げて、具体的な状況が描出されている。地理学研究の精髓と言うべきモノグラフであるとともに、広い視野から水田造成の機構を解明することに努められている。この中で、開田技術を重視して十分な説明を行なったことと、開田後の問題自体を対象として検討を加えたこととは、開発地理学という呼称を使うか否かに拘わらず、研究法を前進させたものであり、土地に根ざした調査から、展望的な水田造成展開の機構を提示したことは業績であると考ええる。

本書は優れた著作ではあるが、なお、次の2点を指摘して、著者の検討を煩わしたい。

本書の筆致はおおむね平明、論旨も一般に明快であるが、各章末の結語部分や理論化をはかっている部分の表現などには、しばしば理解しにくい場合がある。たとえば「従来の水田開発は、それ自体が社会を創造していく意味をもつものであった」「それに対して、現代の水田開発は、その出発点から産業社会の一構成要素として現れてくることを明らかにしようというのが、本書の基本的なねらいである。」という表現からは、著者が何を言おうとしているのか理解できなかった。十分な推敲を望みたい。

現代の開田と題する著作なのに、現代とはいつ以降を指すのか必ずしも明確ではない。“第二次大戦後の現代にいたって”(p.53)という記述がある一方、水田の大潰廃と大拡張との並進の時期として、大正中期以降のものを「現代の開田」に一括する表現もある。昭和初期開田をも現代の開田の類型ないし萌芽とみなしたために、論理に矛盾を生じた面があるのを否めないように思う。「現代」の開田は高度経済成長期以降のものとし、地主制

下の開田は、それとの対比事例として扱えば、現代の水田開発の諸特徴をより鮮明に説明できたのではなかろうか。

(岡本次郎)